

海と山のリゾート開発並進と観光資本家の興亡

——大正期の別府土地信託，別府観海寺土地を中心に——

小 川 功

はじめに

筆者はかつて「観光カリスマ」油屋熊八という特異な観光資本家と大分と湯平とを結ぶ軽便鉄道を発起した銀行家の小野駿一を論じたことがあるが、これは大学主催の「観光まちづくりフォーラム」のために滋賀県にお越し頂いた中谷健太郎氏（「亀の井別荘」は当初油屋熊八個人の別荘として開設された）より油屋熊八の知られざる側面を種々ご教示たまわったことが直接の契機となった。この意義深いフォーラムを主導された山崎一眞教授には滋賀大学産業共同研究センターでの活動を通じて観光まちづくりの実践に関して種々学問的刺激を与えていただいて、今日に至っていることを感謝申し上げたい。山崎氏の精力的な地域振興の実践諸活動に触発された筆者は現在の職場で主に観光経営史の領域に特化して、観光事業にも関わった土地会社数社¹⁾を目下研究中である。土地会社の研究は建築史、金融史、鉄道史その他様々な学際的アプローチが模索されているが、筆者も観光史からの接近を試みているものである。今回取り上げた別府の2土地会社は前稿を執筆する際に現地調査しながらも、紙面の関係で割愛した積み残し部分であり、ごく一部は他の原稿²⁾の中で若干ながら言

1) 御影土地は『彦根論叢』第375号、阪神土地建物は同第378号、日下温泉土地は『生駒経済論叢』第7巻1号、三田浜楽園は『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第7号を参照。なお橘川武郎・粕谷誠編『日本不動産業史－産業形成からポストバブル期まで』名古屋大学出版会、平成19年9月、巻末参考文献参照。

2) 「大正バブル期における起業活動とリスク管理－高倉藤平・為三経営の日本積善銀行破綻の背景－」『滋賀大学経済学部研究年報』第10巻、平成15年12月。亀の井バスに関しては拙稿「湯布院・別府の観光開発の先駆者・小野駿一と油屋熊八」『滋賀大学産業共同研究センター報』第2号、平成15年6月参照。

及したことがある。観海寺については高砂淳氏により「荘園緑ヶ丘／別府 温泉リゾートと郊外宅地開発－観海寺・別府荘園文化村計画」(以下は高砂と略)として、主に多田次平による花園都市観海寺や別府荘園文化村を中心に紹介されており、本稿でも多くの示唆を受けた。また別府観海寺土地の株主・地主として登場する加島銀行系統の人物等については石井寛治氏の一連の加島銀行研究³⁾に多くを負っている。なお別府観海寺土地と密接な関連を有する観海寺温泉の旅館・ホテル群に関しては、近年破綻して加森観光(札幌市)系統で再建されるなど話題の多い杉乃井等を含めて、今後別稿を予定している。なお本稿では新聞・雑誌、会社録、頻出史料は略号を使用した⁴⁾。

I. 多田次平と別府土地信託(別府土地に改称)

1. 主宰者の多田次平

多田次平(別府)は「伊予出身の実業家」とか「大阪で綿糸相場に失敗し、その後朝鮮半島に渡って保険外交で財を成した」⁵⁾と伝えられるほかは詳しい

3) 石井寛治『経済発展と両替商金融』有斐閣、平成19年および平成21年8月24日地方金融史研究会報告ほか。

4) 本稿では新聞・雑誌、会社録、頻出史料は次の略号で本文中に示した。営…『営業報告書』、#…発行回数、[新聞・雑誌] 大毎…大阪毎日新聞、大朝…大阪朝日新聞、大新…大阪新報、福日…福岡日日新聞、西日本…西日本新聞、大分…大分新聞、保銀…保険銀行時報、内報…帝国興信所内報、E…エコノミスト、実日…実業之日本、増田…増田ビルブローカー銀行旬報／[会社録] 諸…『日本全国諸会社役員録』商業興信所、要…『銀行会社要録』東京興信所、帝…『帝国銀行会社要録』帝国興信所、紳…『日本紳士録』交詢社、人…『人事興信録』人事興信所、帝信…『帝国信用録』帝国興信所、商信…『商工資産信用録』商業興信所、日韓…『日韓商工人名録』明治41年、実業興信所、全株…『全国株主要覧』、商…『日本全国商工人名録』、株…『株式年鑑』野村商店・大阪屋商店、衆…『第三版大衆人事録』昭和5年、選集…中西利八編『財界人物選集 第五版』昭和14年、二四…『一九二四年に於ける大日本人物史』大正13年、二五…『財界二千五百人集』昭和9年、保年…太田鶴吉編『保険年報』保険新聞社、紡金…山口和雄『日本産業金融史研究 紡績金融篇』昭和45年、東京大学出版会／[頻出資料] 平面図…「観海寺及別府荘園平面図」、市誌…『別府市誌』昭和8年、高砂…高砂淳「荘園緑ヶ丘／別府 温泉リゾートと郊外宅地開発－観海寺・別府荘園文化村計画」『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会、平成12年、p499～、大同…『大同生命70年史』昭和48年、党人…衛藤庵『党人郷記』昭和8年、大分新聞社、九…『九州の現在及将来』大正5年。

5) 中山昭則『大正期における別府温泉の別荘地開発』『温泉地域研究』創刊号、2003年9月、p19。

経歴は紹介されていない。多田次平による綿糸相場の失敗に該当しそうな状況と考えられるのは、偶然ではあるが前稿の阪神土地でも言及した守山又三・藤井済太郎兄弟らによる三品市場買占めの失敗や、日露戦後の不況に清国の革命が加わり三品市場の綿糸相場は買方総投げとなった明治44年の暴落などである。その直後の明治末期から大正初期に朝鮮半島への進出を本格化させた生保会社の代理店主・保険募集人・機関長などとして多田が活躍する場は存在したものと考えられる⁶⁾。確認出来ていないが、もし仮に大同生命にも何らかの業縁があったとすると、多田が朝鮮半島で活躍していた当時、「大同生命取締役に転任後は各支店支部につき逐次巡回、業務の視察をなし」(T6. 1. 1 保銀) していた大同生命常務の祇園清次郎(別府観海寺土地発起人総代)という、相当程度リスクを愛好する傾向の窺える人物との接点が存在したことになる。多田は大正7年ころまで役員兼務・主要な会社への大口投資など表立った経済活動はまだなかったものと推定される。多田の数少ない情報としては『銀行会社要録』大正7年版役員録に京城府大平通2丁目221, 別府土地信託代表取締役として記載されており、この時点では多田の本拠がなお朝鮮半島にあったことを裏付けている。大正11年版の『日本紳士録』では多田の住所は大阪市西区立売堀南通4-2, 職業は別府土地信託社員, 所得税47円(紳 T11, p124), 『銀行会社要録』大正11年版役員録には立売堀南通4, 別府土地信託代表取締役, 別府観海寺土地専務(要 T11役中, p36)として記載されている程度である。別府観海寺土地の大株主である多田ヒサヨ(773株), 多田静江(500株), 多田弘(365株)など大分県下の多田姓の大株主は多田の妻子・関係者と推測される。

2. 別府土地信託

信託業法施行前の「旧信託会社」たる別府土地信託に関しては麻島昭一編『本邦信託文献総目録』の「会社別目録」の大阪・九州の項目にも当然ながら対象外として一切記載がなく、麻島昭一著『日本信託業発展史』でも別府土地への

6) 朝鮮半島へ販売拠点を置いた国内生保は「清国及韓国ニ於ケル重要各地ニ出張所及代理店ノ設置アリ」(日韓, 下 p7) と海外進出を謳っていた東洋生命(明治40年7月京城支店設置), 帝国生命(明治42年7月京城に出張所設置)などが先行し, 日本生命が大正3年, 明治生命が6年であった。(『朝日生命百年史 上』平成2年, p285~8)。

改称が記載されているにすぎない。別府土地信託は大正7年10月、多田次平の自宅(大阪市西区立売堀南通4-2)内に資本金150万円、払込37.5万円で設立され、別府町に支店を置いた。別府土地信託の役員中に山村豊次郎(後に別府観海寺土地監査役にも就任)など愛媛県の資本家が相当数含まれるのは、別府との距離の近いことのほか、多田の出身地という地縁関係もあるものと思われる。文字通り「海のものとも山のものともつかぬ」別府の海面埋立と別府の山手開発(別府観海寺土地)の二大プロジェクト実現に狂奔する多田を支援して、地元の別府からただ一人監査役に就任した「天満屋」旅館主の安部三郎あたりが当初は別府支店を統括し、地元の人脈を生かして埋築権の譲受面など地元対策に尽力したのであろう。

別府土地信託の事業内容は「別府波止場ヨリ浜脇ニ至ル五百二十五間ヲ埋築シテ二万四千七百五十坪ノ正味宅地ヲ取得スル」(株T10, p722)という当時としては大規模な海面埋立であった。同社役員の顔触れは以下の通り、大阪、東京など多士済々の中央資本家、それも土地会社に多く関与する大葉久吉・前川太兵衛・宮崎敬介・西田正俊等に典型的にみられるような投機的なメンバーが呉越同舟に顔を揃えており、多田らが推奨した別府湾埋立プロジェクトを相当に有望視したものと思われ、別府土地信託の設立の背景も他の多くの大阪の土地会社に共通する投機的な動機であったものと推測される。なかには「海」だけでなく、「山」のプロジェクト(別府観海寺土地)にも共鳴した大葉久吉、前川太兵衛、安田源蔵、山村豊次郎、勝本忠兵衛、安部三郎、友永平次郎など両社の役員・大株主に共通するメンバーも存在する。大葉に大口融資した東京銀行頭取前川らの一派がその中核であり、東京銀行が両社共通株主の背後で株券担保金融の担い手であった可能性を強く示唆している。その後、本社を大阪市西区立売堀南通2丁目に移転、社長橋本喜造、専務矢野丑乙、常務多田次平、取締役大高庄右衛門、山本藤助、大葉久吉、宮崎敬介、西田正俊、伊藤東太郎、監査役前川太兵衛、山村豊次郎、勝本忠兵衛、西村和平、安部三郎、株主数は大正7年11月末で713名であった。(株T8, p712)

大正9年11月末では本店は別府観海寺土地と同じく大阪市南区鰻谷西之町

12, 埋築権28.2万円と埋築費45.2万円, 土地建物3.5万円を投じて, 北側の埋立である「第一区埋築ハ完成セリ」(株 T10, p722), 第3区(浜脇海岸)は大正13年, 第2区(中央部)は昭和3年に竣工した。本店を置いた鰻谷西之町12に所在した先発の土地会社である摂津土地などに株主の名義書替等の本社機能を事実上業務委託していたのではなかろうか⁷⁾。大正13年11月末では監査役は友永平次郎(株 T14, p394)に交代していた。別府土地信託は信託業法の施行に伴って信託業を廃止し, 大正14年ころ別府土地に改称した。(株 T14, p394) 別府土地の本社は大阪市西区新町通4-5(別府観海寺土地は従前の南区鰻谷西之町12のまま)に移転した。(株 T14, p394) このことは別府土地常務と別府観海寺土地専務を兼ね, 同一事務所内で両社の実務を一人で掌握していた多田次平の健康状態の変化や, あるいは彼の独裁体制が崩れたことを意味しよう。

別府土地は不況の最中に経営不振が続き, 大正13年7月「資本金五十万円ヲ減少シ百万円トス。同社株式一万株ヲ交換(当社埋立地ヲ提供シテ株式ト交換ス)及買収ニ依リテ取得シ, 之レヲ以テ減資ニ充ツルコト」(株 T14, p394)を決議した。竣工したものの, なかなか売れない第2区, 3区の広大な埋立地を減資と引き換えに株主に無理やり押しつける形で辻褄を合わせるといふ苦肉の策をとったものと思われる。昭和元年12月「前回と同様の方法にて二十万円を減資」(株 S2, p527)するなど, 前後2度にわたり, 変則的な減資を余儀なくされた結果, 資本金は80万円となり, 株主数も大正15年11月には388名にまで大幅に減少している。(株 S2, p527) 減資直後の昭和2年には中心人物の多田次平が別府両社経営の心労もあったのか, 健康を損なって死亡した。(高砂, p508)

7) 木村準治が主宰する土地会社の実態を古川浩は「北浜一丁目の電車通りに何とか商事という看板を掲げ, その頃は現物屋なら自由に看板を掲げて営業し得る時であったから, 木村もこうやって看板を出して, ほんの真似事ほどの証券売買でもあったのであろうか。大体は店の奥の間も二階も小さい会社の事務所ということにして表看板からいって木村自身が野江土地会社の専務, 天王寺土地会社…専務…, 御影土地会社…専務…というように外にも二三の会社を作りその重役ということになり済ましていた」(古川浩『会社問題の理論考察』昭和31年, p561)と暴露した。

II. 別府観海寺土地の役員・株主

観海寺は別府湾や鶴見岳を見晴らす展望美と清らかな単純泉は、多様性を誇る別府八湯の中でも白眉とも称され、徳田秋声や川端康成等多くの文人達にも愛された観海寺山の山腹の閑静な温泉である。別府観海寺土地は大正9年2月15日「別府観海寺土地株式会社（資本金二百五十万円）は〈二月〉十五日創立総会を開催し左記役員選挙せり。取締役大葉久吉，上田弥兵衛，滝川伊之助，高倉為三，監査役武内作平，友永平次郎」（増田5-6）このほか相談役として祇園清次郎（4,000株），小野駿一（1,000株），菊池清平（600株），前川太兵衛（500株）の4名を挙げた。

「当地の祇園清次郎氏発起となり観海寺土地会社資本金二百五十万円新設八千株を公募に附」（増田4-33）した。本社を大阪市南区鰻谷西之町12（別府土地信託と同一），支店を別府町観海寺の現地に置いた。

〔表-1〕別府観海寺土地の主要株主

<p>(1)「堂島派」資本金家</p> <p>◎○祇園清次郎4,000株 [別府観海寺土地相談役， 再建後の大分銀行取締役]</p> <p>◎○上田弥兵衛1,000株 [別府観海寺土地社長， 大阪の有力米穀仲買商， 代議士]</p> <p>滝川伊之助1,000株 [別府観海寺土地監査役， 神戸棧橋外会社役員]</p> <p>武内作平500株 [別府観海寺土地監査役， 堂島米穀取引所監査役]</p> <p>高倉為三500株 [別府観海寺土地取締役， 堂島米穀取引所理事長]</p> <p>佐藤安熊150株 [大阪市， 大分県出身， 大同生命社員（清原蘇子編『関西大分県人士録』大正10年， p48）， 大正9年～11年大同生命神戸出張所長， 竹田津電気取締役]</p> <p>吉井マサ100株 [加島銀行常務・再建後の大分銀行監査役の◎吉井仲助の妻]</p> <p>吉田武衛60株 [高倉の子分， 商業会議員， 堂島米穀取引所常務理事， 東華紡績取締役]</p> <p>(2)「別府土地信託派」資本金家</p> <p>◎○多田次平2,289株 [別府土地信託ほか（本文に記載）]</p> <p>大葉久吉1,000株 [東京日本橋， 別府観海寺土地取締役]</p> <p>山村豊次郎600株 [愛媛県宇和島市， 別府観海寺土地監査役， 第二十九銀行取締役， 宇和島運輸専務， 宇和島鉄道， 宇和水電， 藤江土地各取締役， 別府土地信託監査役]</p> <p>菊池清平600株 [別府観海寺土地相談役， 愛媛県， 回船米穀商， 生蠟製造， 宇和紡績社長， 矢野鋳業， 増田 BB 各取締役， 第二十九銀行頭取， 愛媛農工銀行監査役]</p> <p>前川太兵衛500株 [別府観海寺土地相談役， 別府土地信託監査役， 東京銀行頭取]</p> <p>安田源蔵500株 [別府観海寺土地監査役， 東京銀行取締役]</p> <p>勝本忠兵衛500株 [大阪市西区， 洋鉄鋼商， 加島銀行取引先（石井報告）， 別府土地信託監査役]</p> <p>友永平次郎200株 [別府の港平旅館主， 別府観海寺土地， 別府土地信託各監査役， 浜脇</p>

倶楽部，別府市市，別府新聞各取締役，世界館取締役，泉都自動車，別府湯ノ花各社長]
安部三郎100株 [別府の天満屋旅館主，別府温泉鉄道，別府ホテル，豊玉館各取締役，別府土地信託監査役]

(3)「大分銀行派」資本家

◎小野駿一1,000株 [別府観海寺土地相談役，大分銀行頭取，大湯鉄道，大分セメント各社長，豊州瓦斯専務，大分県農工銀行，日東護謨，大分企業，小野汽船各取締役，国東鉄道監査役]

◎板井勘兵衛1,000株 [別府観海寺土地取締役，横浜正金銀行退職後に鶴成金山で失敗，豊国鉱業社長，日東護謨専務，大分銀行，拓殖水電興業，日英興業，内外商事各取締役]

原マサ500株 [大正10年死亡した○原駿一郎（大分銀行元頭取の原大三郎の長男，大分銀行，大湯鉄道，日東護謨各取締役）の近親者，原逸の親権者]

武石義夫200株 [万年村，万田銀行頭取，大分銀行，大分県農工銀行，耶馬溪鉄道，日東護謨，和光堂，武有汽船，日本繊維化工各取締役]

太田秀雄80株 [大分銀行支配人兼調査部長，大正商事取締役，鶴崎製糸，豊後土地各監査役]

渡辺由利多50株 [大分銀行支配人，豊州瓦斯取締役，日東護謨監査役]

(4)「神戸信託派」資本家

神戸信託1,000株

永田三十郎600株 [造船業，木津川土地建物社長，東大阪土地建物，神戸信託，北大阪電気鉄道各取締役]

藤尾幸一400株 [神戸信託専務，尼崎土地，北大阪電気鉄道各取締役]

木村宇一郎300株 [大同生命第三部長から神戸信託，北大阪電鉄各常務，塩見同族，大軌土地各取締役]

(5)「農銀系」地元資本家

山田耕平400株 [別府，呉服太物商，浜脇銀行，平尾銀行，別府土地建物，浜脇貯蓄銀行，別府観海寺土地各取締役]

篠崎豊彦290株 [大分証券信託代表取締役，豊後土地，宇佐參宮鉄道，佐伯土地各取締役]

浅利喜兵衛270株 [別府の煙草元売，佐伯土地取締役]

衛藤一六130株 [大分県農工銀行常務，佐伯土地，豊後土地，大分証券信託，大分電気工業各取締役]

中村清三100株 [佐伯土地監査役]

糸園哲50株 [糸園呉服店，豊後土地各取締役]

(6)「別府銀行系」地元資本家

平尾謙平200株 [別府土地建物，浜脇貯蓄銀行，平尾銀行，豊後銀行，浜脇銀行，第一興業，別府製材，広瀬商会各取締役]

中津留幸三郎200株 [米道旅館主，浜脇貯蓄銀行監査役，大分商業銀行，世界館各取締役]

高橋欽哉200株 [泉孫旅館・別荘聴潮閣主，浜脇銀行，別府銀行，大分証券信託，大分農工銀行各重役]

(8) 国武合名関係者

◎国武金太郎1,000株 [(本文に記載)]

(9) その他の大阪株主

吉田定七1,000株 [金物商，大阪電気分銅取締役]

宮崎弥作500株 [大神中央土地専務，甲陽土地専務]

吉村吉造100株 [別府観海寺土地，撰津土地各取締役，四ッ橋建物常務，藤本商事監査役]

(10) 愛媛県の株主

伊予勝山銀行(愛媛)500株 高木次郎450株 [関西貯蓄銀行頭取] 永井虎之輔400株 [伊予勝山銀行取締役] 佐々木長治250株 [二十九銀行取締役] 小西万四郎200株 [愛媛県農工銀行, 御荘銀行, 宇和島製紙各取締役] 宇和島ビルブローカー138株
--

(資料) 別府観海寺土地「第四回営業報告書」大正10年11月および脚注4) に示した各種会社録

(凡例) ◎○印は文化村の区画所有者 ([表-2] 参照)

別府観海寺土地の役員・主要株主を属性・地域・資本系統等により数グループに分類すると以下ようになる。

- ①主流派・筆頭株主・社長・文化村オーナー (◎○印) を含む「堂島派」資本家
- ②東京銀行, 専務を含む「別府土地信託系」資本家
- ③地元大分の有力銀行「大分銀行系」資本家 (憲政会)
- ④「神戸信託系」資本家グループ
- ⑤「農銀系」資本家グループ (大分証券信託, 豊後土地, 佐伯土地を含む)
- ⑥「別府銀行系」資本家グループ (浜脇貯蓄銀行, 別府土地建物を含む)
- ⑦別府町・大分県の株主 (②, ③, ⑤, ⑥以外)
- ⑧国武合名関係者 (後述)
- ⑨大阪の株主 (①, ④以外)
- ⑩愛媛県・その他の株主

①の「堂島派」という用語は大正11年春に「『堂島派』といふ言葉が北浜市場に流れた」(T11. 12. 1 大朝) との祇園清次郎自身の言葉から, 大阪堂島米穀取引所の役員である上田弥兵衛, 高倉為三, 祇園清次郎ら全体を指す言葉として借用した。大正9年初に別府観海寺土地を發起し, 筆頭株主・別府荘園の最大区画所有者でもある祇園清次郎は広岡家の大番頭格で, 加島銀行, 大同生命各取締役を兼ねた。この祇園清次郎は高倉為三・上田弥兵衛の後盾となるなどリスクを選好する傾向があり, 例えば大阪電気軌道(大軌)創立にも深く関与⁸⁾し, 家長の広岡恵三を大軌の初代社長のポストに推戴した張本人とも考え

られる。大正4年7月「経営陣を刷新して社業の再建をはかるため…広岡家の重鎮祇園清次郎を〈大同生命〉常務取締役として迎え入れ」（大同、p40）たとされ、祇園は「祇園氏が大同生命取締役に転任後は各支店支部につき逐次巡回、業務の視察をなしつつあり」（T6. 1. 1 保銀）と各地を巡回視察していた。実力者の広岡浅子が大正8年1月14日死亡しているが、広岡家一統に「不動産で資産を残してやりたい」⁹⁾と各地に別邸・別荘を建築した広岡浅子の遺訓も別府観海寺土地への大口出資、文化村の区画取得に向わせる動機になったのかもしれない。

次に高倉為三という人物の資質は投機的な本性を隠して先代を信用させて養子になり、先代の没後に本性を現した人物で、海千山千の高倉藤平、今西林三郎らも高倉為三の本質を見破れなかった。彼を扇動し、投機的事業に引きづり込んだのが上田弥兵衛らの堂島筋の一派、ハイリスク・マネーを供給したのが加島銀行等であったが、反動恐慌以降に目の前にあった自分の銀行の金庫から有り金を残らず持ち出したのが日本積善銀行の背任横領事件である。別府観海寺土地は大正11年12月高倉為三による日本積善銀行破綻事件勃発の際に、取材の大阪新報記者に対して「上田弥兵衛、社長にある関係から高倉氏の取締役就任を見たもので、株式総数五万に対し高倉氏の持株五百株、上田氏一千株と登記されてゐる。同社は加島銀行を主要取引銀行とし、外三行と取引してゐるが、積善との関係は全然否認してゐる」（T11. 12. 3 大新）との趣旨の「関係会社其の言ひ分」が報じられている。営業報告書での預金先は「藤田銀行外五行」

8) 広岡恵三が大軌創立委員長となった経緯として、養父・広岡信五郎も大阪運河取締役となるなど大軌創立委員の七里清介と加島銀行が密接な関係にあつて、祇園清次郎は「七里翁や金森（又一郎）君等が…大軌電車を創立される時にも、前以て下相談があり、私も七里翁や金森君と一緒に、草鞋ばきで…生駒山脈を跋涉した」（祇園清次郎追懐『金森又一郎翁伝』p58）と回顧している。後に養母・広岡浅子（広岡信五郎の妻、三井三郎助の実姉）がリスクを察知して「家庭内の事情を理由として」（同伝p63）恵三を辞任させる「一方岩下を勧説して、この難局は岩下に非ずんば、收拾すべからず」（西野喜与作『半世紀財界側面誌』昭和7年、p322）と説得した。祇園は大正バブル期の新興企業設立に深く関与し、別府大分電鉄の初代監査役も兼ねるなど、別府大分地区とも緊密な関係を有していた。

9) 古川智映子『土佐堀川 女性実業家広岡浅子の生涯』潮出版社、平成元年、p225。

(T12/5 # 7 営), 12年11月末時点の預金先は「加島銀行外二行」(T12/11 # 8 営)とあり, 加島銀行のほか藤田銀行その他で約18万円の預金を有していた。

②の「別府土地信託系」は多田専務の母体であり, 近江銀行と合併した旧東京銀行系資本家グループが中核を成している。東京銀行の「前川頭取は近来種々なる事業に関係して, 人をして危惧の念を抱かしむるの傾向あり…表面花々しきが如くに見ゆる東京銀行近来の活躍は, 洵に噴火山上に舞踏するもの」¹⁰⁾と, かねて同行のハイリスク選好が指摘されていた。

③の「大分銀行系」は「親分と奉られる」(党人 p 6)〈小野の「財的支配力の前に跪坐した党人, 財人の多くに誤まれ」(党人 p 6), 「雨後の筈の如く簇生した泡沫会社から…無心をいはれ紙屑同然の株券を担保に資金を融通した」(党人 p 8) 小野駿一が頭取の大分銀行が「県憲政会ノ機関銀行トモ目スヘキ状態ニアリシヨリ, 該系統ニ属スル事業ニ対シ其放資額少ナカラサリシノミナラス, 小野頭取以下二三重役ノ如キハ傍ラ諸種ノ事業ニ関係セルヨリ, 自然之等事業又ハ重役個人ニ対スル融通多ク…約五百万円ヲ超エ…同行総貸出高ノ約一割七分ヲ示セル程」¹¹⁾とされた。別府観海寺土地もこうした同行系泡沫会社の一つと位置付けられよう。

④の神戸信託は大正7年下期に北大阪電気鉄道13,600株を一挙に取得して系列化, 北大阪電気鉄道沿線において本邦初の不動産投資信託を創始し, 「近時都市及郊外地価が著るしく昂騰を告げ, 恰も不動産が資本化せる観を呈しつつ

10) 三木幾太郎『疑問の人』大正2年, p277。石井寛治氏は旧東京銀行頭取前川太兵衛が地道な融資よりも, むしろ虚業家とも解される竹内綱など「危険の多い新規事業に乗り出した企業家の派手な融資に傾斜」(石井寛治・杉山和雄編『金融危機と地方銀行』平成13年, 東京大学出版会, p420)する性癖を指摘した。石井氏によれば東京銀行を合併した際に近江銀行の新しい監査役になった「大葉は, 大戦ブーム期には洋服輸入や軟鋼鉄板・レール輸入などの貿易業務にも手を広げ, 信用状の発行などを近江銀行に依存していた。融資のうち担保付きは20万円にすぎない」(石井, p426~7)として, 大葉久吉を前川が傾斜した竹内綱など「危険の多い新規事業に乗り出した企業家」(石井, p426)の一人に想定している。

11) 日本銀行金融研究所編『日本金融史資料 昭和続編』付録4巻, 地方金融史資料(四), 昭和62年, p541。

あるも、小資本家は価格不廉なる為め容易に指を染むる能はず、勢ひ預金又は小口貸付に甘んずるの外無き状勢に在ると、且一般同業会社が単に在来の信託事業本位を格守して旧套を脱衣せざるに鑑み、並に一新生面を拓くべく今回保証付不動産投資信託なる新企画書を発表」(T10. 4. 20内報③) するなど、一見革新的な信託会社の一つであった。神戸信託と大同生命との接点として少なくとも大正6年12月まで大同生命第三部長の座にあった木村宇一郎がその後神戸信託と北大阪電鉄両社の常務に転じているという事例があり、木村は別府観海寺土地の300株主ともなっている。しかし兵庫農銀、大同生命等とともに地元の播州鉄道社長の伊藤英一と深い取引のあった金融機関として神戸信託は伊藤英一の失脚でも大きな打撃を受けた。

⑤の「農銀系」資本家グループの性格は中心と目される篠崎豊彦の経歴に代表させることができよう。篠崎豊彦(速見郡御越町)は福岡県鞍手郡吉川村に生れ、教員を経て小倉第十七国立銀行に入り、日清戦争時に「銀行から資金を繰出して不動産を買った…ぺいぺいの銀行員風情では気の遠くなるほどの成金」(党人, p174) となり、日露戦争時にも「十年前に味った土地成金の甘味を忘れず、一か八かで〈大連の〉借地権を買ひまくった」(党人, p174) 結果「何百万円の大成金」(党人, p174) となった。「余生を楽しむ隠居所を求めて大連から亀川にやって来た」(党人, p174) 篠崎は亀川町長として銅像も建立(党人, p175)、第14回総選挙で大分2区選出憲政会代議士、民政党から代議士(補選)にも当選した。篠崎は二度の戦時景気を楽しんだ典型的な土地成金であった。新別府温泉の土地購入者で『党人郷記』は篠崎を「押と膽とで幸運を戦ひ取った一代の快男児」(党人, p174) と評して、大正バブル期の「奮闘伝」の一端として「衛藤、篠崎、内田の三角関係」(党人, p175) を紹介している。篠崎は「先づ知合った内田安太郎のすすめで、農工銀行に預金したことから、当時農銀支配人だった衛藤一六と懇意になり、衛藤、篠崎、内田の三角関係」(党人, p175) が形成されたと指摘されている。大分証券信託、豊後土地、佐伯土地の3社とも衛藤、篠崎、山田耕平らが共通の主要役員として支配する姉妹社的存在で、おそらく農工銀行を背景に不動産投資に関心ある有力

者層が結集していたと思われるので、ここでは3社の役員陣を⑤グループに分類した。

⑥としては別府銀行、浜脇貯蓄銀行、別府土地建物等の役員陣を「別府銀行系」資本家グループに分類し、その他の地元株主を⑦のグループとしたが、もとより⑥と⑦のグループに明確な境界を引けるわけではない。

Ⅲ. 別府観海寺土地の経営地

同社経営地(観海寺、堀田、飛地獄、別府荘園)は「別府町ヨリ十数町ノ山手観海寺温泉一帯、速見郡石垣村」に所在し、T9/11期には108,874坪6@3円29銭8厘(株T10, p744)、T12/11期には125,248坪58(T12/11#8営)、T13/5期には125,400坪58(株T14, p394)、大正15年11月期には125,400坪58、建物22棟1,099坪25(株S2 p527)であった。このうち「土地高燥、空気清澄、風光絶佳、温泉場、療養邸宅地としての模範郷なり」と「理想的温泉付邸宅地」(平面図)を謳う観海寺地区は3.2万坪、別府荘園は9.1万坪であった。観海寺には「千年の歴史ある別府第一の無色透明且つ胃腸病特効の温泉あり」(平面図)、「四季花木十五万本を植樹し付近一帯常春の美装を凝らし真に花の歓楽境」(平面図)と謳っていた。両経営地とも「会社直営の上水道及各屋敷に配給する無色透明の有効温泉の設備中なり」(平面図)とした。このうち別府荘園は別府観海寺土地が大分県有林の払下げを受けて開発したもので、「全域東と南へ七分の一勾配の平坦地にて座ながら、海と山の眺望を恣にし加ふるに靈効温泉上水道の引用自由なり」(平面図)、「全地帯は桜、紅葉等を混植せる小松原にして苔蒸す巨岩点在し、大自然其俣の画の如き理想境なれば縦横観賞道路に特に桜、楓、萩、ツツジ、バラ等を栽植し、一帯を美化せしめ、町名も亦バラ町、萩町の如く命名せり」(平面図)と宣伝した。別府観海寺土地は「自社経営の別府荘園の開発に資せんが為め予て付帯事業として、芸妓検番及び東京式待合、日用品市場、貸別荘及び貸家具等の管理並に案内を目的とする三業株式会社創立の意図」(T10.9.14内報③)を有していたが、10年9月資本金15万円で創設を決めた。別府荘園の設計は大阪市公園技師衣笠滋三の指導を受け

たもので、園内に「文化村建設、公設市場、噴泉浴場、常設館、テニスコート及オトギ園（一名猿公園）と各所の広場に噴水等の設計を為せり」（平面図）とされた施設が上記の付帯事業に該当するものであろう。このうち公設市場は別府荘園の第一期開発区域のほぼ中央部に設置された。温泉リゾートに堅い「公設市場」という名称を使用した点がいかに公設市場の本場・大阪市技師らしい発想と思われる。

乗合バス開業後の「観海寺及別府荘園平面図」と題した分譲パンフレットには第一期別府荘園の北側の「バラマチ」と名付けられた三間道路沿いの大きな区画からなる約20区画の「別府荘園の一部は前記諸氏により文化村として経営せらる」（平面図）とあり、「文化村」地区は11者（10人と1社）（◎印）による別経営であったことが判明する。3区画を所有した祇園清次郎と多田次平、国武金太郎らが主導して、大正10年以降に開発したものとみられる。なお「文化村」地区には「テニスコート オトギ園」（平面図）も併設されていた。「バラ町（文化村）所有者」として「観海寺及別府荘園平面図」に記載されているのは〔表-2〕の通りである。加島・大同生命系統の人物が圧倒的に多いのが最大の特徴である。

〔表-2〕 文化村の区画所有者一覧

◎◎星野行則（ソ、ツの2区画、非株主） 星野行則（兵庫県武庫郡住吉村）は加島銀行東京支店支配人、本店専務理事、常務、加島貯蓄銀行監査役、明治37年大同生命監査役、大正7年大同生命取締役、広岡合名理事長、大阪電球監査役、昭和5年大同生命監査役退任、昭和6年財界を引退、昭和35年5月1日死亡、享年90（大同、p32）
◎◎前田松苗（オ、ワの2区画、非株主） 前田松苗（南区天王寺上ノ宮町）は明治10年10月18日旧福井藩士の子として京都に生れ、広岡恵三の養妹アキ（明治18年生）の夫となり、京大医卒、医学博士、日本赤十字社大阪支部病院内科医長
◎◎松井万緑（ニの1区画、非株主） 松井万緑（東成郡天王寺）は明治13年群馬県に生れ、明治38年東大法科卒、第一銀行に勤務、文書課長、検査役、広島支店長を歴任。広岡信五郎の娘（広岡恵三の養妹）ツタ子（明治16年生）の夫となり、加島銀行常務取締役、大同生命保険、加島信託、日本染色各取締役、昭和41年10月5日死亡、享年86（大同、p65）
◎◎加輪上勢七（ネの1区画、非株主） 加輪上勢七（東成郡天王寺）は明治9年7月30日先代・加輪上勢七の長男・鹿蔵として生れ、加島銀行副支配人、営業部長、取締役支配人を経て、常務、大正14年大同生命監査

役、昭和7年取締役、昭和20年監査役辞任(大同、p383)

◎○祇園清次郎(イ、タ、レの3区画,4,000株主)

祇園清次郎(東成郡天王寺村)は慶応2年6月28日和気勘三郎の三男に生れ、加島屋岡山支店に入り、明治29年加島銀行支配人、常務、大正4年大同生命常務、昭和15年9月12日大同生命監査役在任中に死亡、享年74(大同、p32)

◎○吉井仲助(ハの1区画、非株主、妻マサは100株主)

吉井仲助(兵庫県武庫郡大社村)は明治11年7月7日伯爵吉井幸藏の弟に生れ、明治36年東大法科卒、日本銀行大阪支店調査役、松本支店、京都支店各支配人を経て、加島銀行常務、大正14年大同生命取締役就任、昭和3年大同生命取締役辞任

◎○平沢真(ホの1区画、非株主)

平沢真(兵庫県武庫郡精道村)は明治33年東北大農卒、加島屋出身、護国生命を経て大同生命社長秘書役、庶務・主計課長、秘書役兼第一部長、大正6年大同生命支配人、9年取締役支配人、常務、昭和23年2月死亡(大同、p383)

◎大日本木管(カの1区画、非株主)

大日本木管(尼崎市大物村43)は明治43年9月設立、資本金458.7万円、社長上田弥兵衛。

◎○国武金太郎(ヨの1区画、1,000株主)本文に記載

◎○上田弥兵衛(チ、リの2区画、1,000株主)本文に記載

◎○多田次平(ロ、ヌ、ルの3区画、2,289株主)本文に記載

○原駿一郎(豊岡)本文に記載

○板井勘兵衛(大分)別府観海寺土地取締役(12年3月30日辞任)、大分銀行取締役ほか

(資料)◎印は「観海寺及別府荘園平面図」別府観海寺土地、大正12年4月以降、○印は「光栄アル名勝地及別府荘園ノ経営」別府観海寺土地、大正12年3月以前(高砂、p512所収)、非株主は別府観海寺土地「第四回営業報告書」大正10年11月の株主名簿に記載なし。

高砂氏が提示する「光栄アル名勝地及別府荘園ノ経営」(改訂後のものとの区分上、旧版という)には「当会社の別府荘園開拓に順応し、其隣接地二万坪を左の諸氏により買収し率先して別荘を建築せられ、之を一般に解放する事となれり」(高砂、p512所収)とあり、別府観海寺土地の「開拓に順応」したものだとしても、あくまで別物の協賛事業だったと読むことができる。彼らが「率先して別荘を建築」しようとした証拠としては、「尼崎 大日本木管株式会社慰安所」とあり、明らかに役員・幹部向の保養施設の建設を意図していたことが明確に読み取れる。高砂氏は文化村の区画所有者に関して『『東京、大阪、満鮮地方より既に土地買収希望者続出』は前出の株主諸氏であり、土地は会社設立の際に出資者に対する名義料として供与」(高砂、p508)されたものと解釈している。しかし祇園清次郎(4,000株)、上田弥兵衛(1,000株)、多田次平(2,289株)、小野駿一(1,000株)、原駿一郎(大正10年4月21日死亡により、

近親者の原マサ名義で500株)、板井勘兵衛(1,000株)、国武金太郎(1,000株)の7名以外の文化村の区画所有者は旧版の広告が刊行された時期(原駿一郎死亡の大正10年4月以前か)に近い大正10年11月末では別府観海寺土地の株主ではない。筆者としては発起人総代の祇園清次郎ら1,000株程度の出資者(おそらく原始発起人)に対する発起人株・功劳株的な意味合いで、無償を含む低廉価格など極めて優先的に割り当てた発起人区画が文化村ではないかと解釈している。非株主の区画所有者は例外なく広岡家一統・幹部行社員であり、祇園名義の4,000株に対する割当に相当しよう。筆頭株主の祇園清次郎が何らかの現物給付としての創業者利潤を要求した結果なのか、広岡家一統・幹部行社員だけで構成され、余人を交えぬ金持ち別荘村たる「文化村」づくりを目的とした行動なのかは判然としない。あるいは大分銀行休業の直前という切迫した状況での「其隣接地二万坪を左の諸氏により買収」した真意を勘ぐれば、別府観海寺土地関係者への貸付などの債権を有する加島銀行サイドが代物弁済による債権回収を意図して別府観海寺土地の2万坪の所有権を取得した可能性も否定できまい。そして所有権の名義を加島銀行の特権的な一部役職員の名義に分散したとの解釈である。しかし先代の広岡浅子が広大な別荘構築に努力してきた広岡家の伝統から判断すると、前者の色彩が強かったのではなかろうか。また上田社長、多田専務ら執行部からみれば、仮に破格の格安分譲であったにせよ、当時は住友と並んで大阪財界の超一流に位置していた加島屋・広岡家一統のネームバリューを高級別荘地分譲の宣伝に活用できるメリットは相当に大きかったものと考えられる。

原駿一郎死亡、板井勘兵衛辞任後、かつ12年4月28日観海寺まで乗合バス開業後に刊行された「観海寺及別府荘園平面図」(新版)では○印を付した旧版の12人のうち、大正10年4月21日死亡した「豊岡 原駿一郎」と大正12年3月取締役を辞任した「大分 板井勘兵衛」の2名が姿を消して、大日本木管ほか11人に変更されている。原駿一郎は大分県速見郡豊岡町の大地主・大分銀行元頭取原大三郎の長男だが、住所を大分ではなく、あえて全国向の資料としては無名なローカルな地名(兵庫県の豊岡と誤認を招く)にしてあるのか意図が不

明である。銀行経営者としての何らかの世間を憚る配慮から原本が名前を出すことを渋ったのかもしれない。大正11年12月21日大分市に本店を置く大分銀行が取付けに遭遇して休業に追い込まれたので、破綻銀行役員の名を当社役員として広告に掲げて置くわけにいかず、新版の「観海寺及別府荘園平面図」では原名義の区画を上田社長自身が社長で名義を使用し易い「尼崎 大日本木管株式会社慰安所」に急遽切り換えたものと推測される。

IV. 別府観海寺土地の経営状態

10/11期では資本金250万円、うち払込62.5万円、預金現金83,440円、創立費12,180円、仮受金1,566円、仮払金20,740円、支店勘定303円、電話勘定及什器4,378円、不動産454,753円、工事費41,638円、植樹費2,566円、前期繰越損失5,462円、当期損失702円であった。(要 T11, 大阪 p32)

役員は社長上田弥兵衛、専務多田次平、取締役滝川伊之助、高倉為三、板井勘兵衛、大葉久吉、国武金太郎、原駿一郎、山田耕平、監査役武内作平、安田源蔵、山村豊次郎、友永平次郎であった。(株 T10, p744, 要 T11, 大阪 p32)

社長の上田弥兵衛と専務の多田次平のコンビ¹²⁾は比較的長く継続しており、二人の結び付きが別府観海寺土地以前から形成されていたことを窺わせる。別府観海寺土地は11年11月末時点で土地買収・造成資金としての借入金30万円があり、恐らく229,893円の預金先の「藤田銀行外五行」(T11/11#6営)のいずれか(同社役員の関係する積銀、加島、大分銀行等を含む)からの調達と考えられる。大正11年観海寺温泉の大石橋が竣工した。13年時点の『株式年鑑』によれば別府観海寺土地は大阪市南区鰻谷西之町12に本店を観海寺に支店を置き、所有地は観海寺温泉一帯(観海寺、堀田、飛地獄、別府荘園)125,400.58坪、「目下整理中」とあった。13年5月期のP/Lには大分銀行破綻に関連した

12) 上田弥兵衛の数多くの兼務先のうち、多田次平との接点があった可能性が高いものとして投資先が朝鮮半島の日鮮土地(大正8年11月設立、監査役)がある。代表取締役社長の清水栄次郎は中央別府温泉土地、別府大分電鉄各社長を兼ね、清水が社長の清水土地山林も別府観海寺土地110株主となるなど、清水が上田と多田次平の接点となった可能性もあろう。

整理損金の処理の科目群と思われる「重役提供金」36千円、「土地評価益」36千円、「大分銀行整理損金」(株 T14, p394) 73千円を計上した。

12年5月期に別府観海寺土地は大分銀行休業など「大分県下財界ノ悪影響ニヨリ当社諸般ノ経営ハ総テ消極的方針ノ下ニ人員ヲ淘汰シ本支店ノ諸経費ヲ半減シ、常任者ヲ除キタル役員及相談役ノ報酬ヲ辞退」(T12/5 # 7 営)、翌12年11月期にも「常任役員報酬ノ減額並ニ再度ノ社員淘汰ヲ行」(T12/11 # 8 営) うなどリストラを実施するも、両期とも石垣村、朝日村等に所在する当社所有地である別府荘園ほかの分譲実績はゼロであり、連続して当期損失を計上、12年11月末の繰越欠損は8,615円に達した。12年5月末時点の預金は「藤田銀行外五行」180,268円 (T12/5 # 7 営)、12年11月末時点の預金は「加島銀行外二行」180,035円 (T12/11 # 8 営) であったが、恐らく大分銀行を含むものと思われる。大分銀行取締役の板井勘兵衛が12年3月30日別府観海寺土地の役員を辞任したのも大分銀行破綻関連であろう。たとえば大分銀行取引先の国東鉄道の場合、増資払込の最中に大分銀行休業が勃発し、取引銀行の「大分銀行杵築支店ニ提出スレハ現金交付ヲ受クル筈ノ所、同行目下休業中ニ付」¹³⁾ 打撃を蒙っている。同様に別府観海寺土地の場合も大分銀行破綻に関連した預金の処理損失等のために、大分銀行にも関係していた板井重役らが私財を提供し、足りない部分を所有する土地を再評価して含み益を吐き出す形で整理をしたものであろう。別府地区の先発企業であり、多田専務、友永監査役の2役員が関係する別府土地(旧別府土地信託)もほぼ同時期に変則的な減資を余儀なくされている。

12年4月28日別府～観海寺間に直営の乗合バスを開業、「乗合自動車開始後ハ各旅館何レモ客数ヲ激増」(T12/5 # 7 営) し、観海寺地区の中央に位置する「リョカンチタイ」「ギオンシンチ」(平面図)に建設した松葉など、観海寺に所有する24棟1,304坪の「所有貸家ニ対シ相当貸家賃ノ増徴ヲナスベク…交渉中」(T12/5 # 7 営) であった。ただし乗合業は「消極方針ノ下ニ之レヲ伊藤自動車商会¹⁴⁾ニ営業権ヲ無償ニテ貸付ケテ之レガ委託経営トナシ、交

13) 大正12年2月6日『国東鉄道一件綴』。

通機関ノ完備ヲ図」(T12/5#7営) ったため、T12/11期の損益計算書には乗合業は収支とも開示されていない。

別府観海寺土地の損益勘定は貸地・貸家料、手数料、雑収入とも売上高は4千円、給料、旅費、雑費其他諸費とも費用が3千円、当期利益0、後期繰越損失8千円であった。(株S2, p527) 大正15年11月末時点の株主数は221名、不動産63.8万円、工事費18.2万円、諸設備費11.3万円、借入金20.3万円、仮受金13.1万円、支払手形2.4万円であった。(株S2, p527) 整理の効果か収支トントンの状態に改善している。整理後の大正15年時点の役員は社長国武金太郎、専務多田次平、取締役大葉久吉、上田弥兵衛、山田耕平、吉村吉造(100株主、12年12月選任)、監査役友永平次郎、滝川伊之助であった。(株S2, p527)

板井が取締役を辞任した後の12年12月選任された吉村吉造(100株主)は大株主とはいえず、四ツ橋建物常務、摂津土地取締役など藤本清兵衛が関係する土地会社の実務者であった。また国武金太郎の評伝が「別府市の山林約六千六百アールを買収開拓して、温泉を発掘、水道を設けて住宅地を形成、別府市の発展に大いに貢献した」¹⁵⁾とするのは別府観海寺土地(大正9年2月設立)の整理後に社長に就任し、実権を掌握した以降のことを指すものとみられる。

国武喜次郎(久留米市日吉町)は久留米緋を全国に広めた有名な久留米緋間屋として久留米の財閥とか、機業王、久留米緋の大王、「南筑の猛虎」などの異名をとった¹⁶⁾。父と同じく久留米緋王と呼ばれた長男の国武金太郎は明治7年10月国武喜次郎・ミサヲの長男に生れ(人T7く, p28)、明治33年国武特許緋合名会社を設立、明治37年国武合名会社と改称、国武合名会社支配人、別府観海寺土地取締役(要T11役中, p162)、久留米緋緋両組合長、久留米商業会議所特別議員であった。国武金太郎は昭和2年家督相続、国武合名代表社員

14) 伊藤自動車商会(伊藤バス)経営の伊藤徳兵衛は別府の旅館主、温泉タイムス社長、別府商工会議所議員。伊藤バスは昭和14年12月亀の井遊覧バスに買収された。

15) 『先人の面影 久留米人物伝記』昭和36年, p307。

16) 国武喜次郎は弘化4年久留米通町の貧しい魚商の長男に生れ、久留米緋業に転じ、全国に販路を拡張、紡績各社と取引、株主ともなった。呉服太物商・国武合名会社代表社員、大川鉄道取締役、岩田屋呉服店などに関与する一方朝鮮に農場を経営した。

となり、「体軀肥へて見るからに精力の絶倫なると覇気の満々たるを覚えしむる快男児」(九, p893)とも評された。

国武合名は「朝鮮及支那山東省に於て大々的に農業林業塩田事業等を経営し、九州別府に於ては林間住宅地区経営を創め、一大永住保健街を出現せしむ」(選集, p939)とされた。国武合名関係者は前述のとおり設立当初は非主流派にすぎなかったのにもかかわらず、最終的には別府観海寺土地ないし同社資産を全面的に支配・継承できた遠因もⅡで詳述した①から⑤までの大株主グループの分析により明らかとなる。すなわち他の多くの大株主グループが取付リスクの高い銀行・金融機関を資金的な後ろ盾としていたため、反動恐慌から金融恐慌に至る恐慌期にはグループの中核たる破綻銀行とともに急激な没落を余儀なくされ、当然に不採算の別府観海寺土地株式の保有継続など困難となる状況に追い込まれた。こうして他の支配株主が持株を手放す中で、久留米緋の販売網から上がる商業利潤に依拠する国武合名は、長期・長々期の観点に立った独自の不動産投資を貫くことができたのであろう。

Keeping Abreast of Mountain & Seaside Resort Developments and Risky Capitalists of Tourism: Focusing on the Beppu Land & Trust Company and Beppu Kankaiji Land Company in the Taisho Era

Isao Ogawa

Abstract

Examined in this paper are two land companies founded by Jihei Tada—a businessperson who came back to Japan after making a fortune on the Korean Peninsula—in an attempt to simultaneously turn the beach and mountain areas in Beppu, in the central part of Oita Prefecture on Kyushu Island, into a tourist destination. Beppu Land and Trust Company was established in October 1918 with the aim of reclaiming 82,500 square meters of land from the sea and utilizing the area for residential purposes, for example accommodating tourists. The objective of founding Beppu Kankaiji Land Company in February 1920 was to build dream houses with spas and gardens filled with cherry and Japanese maple trees around a hot spring resort on a mountainside. Both companies are products of a mania for speculation in the midst of the bubble economy of the Taisho Era. Most capitalists who took part in the aforementioned undertakings as founders or major shareholders including president Yahei Ueda of the latter company and director Tamezo Takakura were hit hard by an economic depression. Both companies' land management, such as that for building homes for sale and renting homes, faced problems due to the recession. A run on the former Oita Bank, a local financial institution deeply involved with the business of Beppu Kankaiji Land Company,

also exerted a negative impact. The speculative nature of these two companies was supposedly reflected in financial difficulties of banks connected to capitalists who had invested in the companies. Many such banks, like the Nihon Sekizen Bank, were forced to face a run, go bankrupt or suspend business operations. This report will focus on collective investment behavior of capitalists related to Kashima Bank or Daido Life Insurance Company, both of which were run by the Hirooka family, which owned land in a cultural village in the mountain area. An analysis of shareholder groups formed in major cities right after the inception of the Beppu Kankaiji Land Company will be introduced.